

## 『入大乘論』と中観学説

八 力 広 喜

堅意造『入大乘論』は、その題名の示すように、大乘仏教の入門書であろうことは想像しうることである。すでに、このような観点からの論稿がみられるし、また『入大乘論』の解説は、この点を考慮してなされている。

大乘仏教の教理的特徴については、従来より諸学者が列挙するところであるが、多くの学者は、空の思想を特徴の一つとして挙げている。従って、『入大乘論』にも空の思想が言及されることは当然予測されることである。じじつ、この論には般若経、中観学派の諸論師の名、論書が引用されている。

本稿の目的はひとまづ、『入大乘論』における『中論頌』の引用を検討して、大乘仏教論書における中観学説の展開を研究する一助としたい。ここで筆者が特に『入大乘論』を選んだ意図はこの論には如来藏思想が言及されたり、中観学派の諸論書の引用など、注目すべき点のあることによるものである。

ところで、この論に言及する論稿はきわめて少なく、比較

的ままとまったものとしては、宇井伯寿博士『宝性論研究』の中の論及である。従って本稿も著訳者については宇井論文に多く負っていることを記しておく。

まず本論に先立って、『入大乘論』の著訳者について再論しておきたい。

宇井博士によれば、堅意についての記述は唐代僧祥撰『法華経伝記』が唯一最初のものであり、この書の年代は『伝記』の内容から推定して、七四五―九〇六年までの間ということになり、仏滅六百年の初、堅意が『法華経』の釈論を作ったという記述から、堅意の年代は二五〇―三三〇年又は三〇〇―三五〇年の人と推定している。唯一の資料であるから、この説の当否の批判はできないが、かれの名は中観学派の系譜の中に見い出せないということも考慮しておく必要がある。

堅意に関する資料と比較して、訳者道泰の記録は多く残されている。経録に道泰の名が出るのは『入大乘論』『大丈夫

論』の翻訳に関してよりも、旧訳『大毘婆沙論』序を書いた道挺によるものが詳細かつ信頼すべきものであろう。従来より道泰についての説明はほとんどこの序を典拠としている。

沙門道泰というもの有り。才敏なること天よりす。沖氣疎朗にして、博く奇趣を闡め、遠く異言を参す。往に漢土には方等即ち備わり、幽宗粗暢びたるも、其の未だ練かざる所の三藏九部あるを以ての故に、策を杖き嶮を冒し、爰に葱西に至り、梵文を綜攬して、義は高旨を承け、并に其の胡本十万偈を獲て、既に涼境に達したり。<sup>(8)</sup>

この序によれば、道泰は梵文に十分に通じていたことが知られるのであるが、このことについては『入大乘論』中に引用される経論の現存梵本、漢訳の異訳の比較等によって、その特徴もある程度推測しうるものと思われる。

いずれにしても、ここで考慮しておきたいことは、『入大乘論』の道泰訳ということは、経録の検討によれば、隋代五九四年頃から言われるようになったことであり、道泰は三九四―四三九年頃の人物と考えられることから、『入大乘論』はかなり後代になって道泰訳とされるに至ったことである。従って『入大乘論』の道泰訳ということについて問題とする余地もありうるということである。

さて『入大乘論』には多数の経論が引用されていることが知られているけれども、当面の問題である中観学派の論師に

ついては、ナーガールジュナが六回、提婆が八回、羅睺羅が二回引用されている。そしてナーガールジュナの引用六回は次のような偈である。

- (1) 如尊者竜樹所説偈  
不從虛空有 亦非地種生  
但從煩惱中 而証成菩提
- (2) 如尊者竜樹所説偈  
十二因緣空 我今欲解說<sup>(9)</sup>  
仮名因緣法 此即是中道
- (3) 如尊者竜樹所説偈  
執有名為常 計無則為斷  
若離於有無 是名真実空
- (4) 如竜樹中論中説偈  
執有取体相 執無者無体  
不存於有無 是名真実観
- (5) 如尊者竜樹所説偈  
因緣所生法 是即無自性  
若無自性者 云何有体相
- (6) 如尊者竜樹所説偈  
不說分別諦 不得於実諦  
若不得実諦 則無得涅槃  
復次説偈

(a) 諸仏演說法 常依於二諦

分別於世諦 及与第一義

(b) 若不能分別 真俗二聖諦

如是則不知 仏法甚深義

以上の六回であるが、これらの偈の出典を探ろうとすると必ずしも容易ではない。先に引用した偈のうち(1)、(3)、(4)は竜樹の著作とされるもののなかに検索しえない。(4)は明らかに「復次如竜樹中論中説偈」とあるから、当然『中論頌』の中の偈と考えられるのであるが、正確に一致すると思われる偈を見出すのは困難である。従って今は引用偈の明らかなものについてのみ順を追って検討を加えることにしたい。

(2) 十二因縁空 我今欲解説

仮名因縁法 此即是中道

これは『中論頌』中で有名な偈、第二十四章第十八偈に相当する偈である。羅什訳は次のようになってゐる。

衆因縁生法 我説即是無

亦為是仮名 亦是中道義

周知のように、縁起、空、仮、中道が同義であるとするナールジュナの主張を表明した偈としてあまりにも有名である。しかし『入大乘論』のように『中論頌』の諸註釈の漢訳は「衆因縁生法」の部分第一句を「十二因縁」とはしていない。このことは、『中論頌』に説かれる「縁起」には二つ

の意味が区別されて使用されているからで、このことを『中論頌』の諸註釈者は了解しているものと思われる。これに対して『入大乘論』はこれらの相異を無視していると考えられる。『入大乘論』の問答は次のように展開する。

問曰 何等をか名づけて三解脱門と為すや。

答曰 空無相無願を行ずることなり。

問曰 云何んが空と為すや。

答曰 我れ衆生の自体有ること無く、性相常に寂なるを觀す。

問曰 云何んが解了するや。

答曰 當に十二因縁に入るべし。

問曰 是の空解脱十二因縁法と異なるや。

答曰 空と十二因縁は等しく異相なし。空は即ち十二因縁、十二

因縁即ち是れ空なり。何を以つての故に。因縁は仮に起る。

自体有ること無し。尊者竜樹の所説の偈の如し。(2)の引用が続く)

この問答で明らかのように、三解脱門中の空解脱の説明の論証としてこの偈が引用されている。そして空と十二因縁は等しいものであるとのべ、『中論頌』の偈と同様な解釈をするのであるが、先にふれた如く、『中論頌』では「縁起」は「相依性」つまり論理的関係の「縁起」と時間的生起関係の「縁起」の二種類が言及されており、第二十四章第十八偈の場合には主として前者を指すものと考えられるから、ここに

いうように「十二因縁」とするのは不用意であつて『中論頌』の趣旨を必ずしも了解したものとはい難いのである。

ところで『中論頌』第二十四章第十八偈が三解脱門と関連づけて引用される例は他にもあり、例えば『大智度論』卷六<sup>16</sup>は次のようになってゐる。

問曰 何等をか甚深法なりや。

答曰 先に甚深法中に説くが如し。復次に甚深法とは、十二因縁中に於て展転して果を生ず。因中に果有るに非ず。亦果無きに非ず。是の中より出ず。是れを甚深法と名づく。復次に三解脱門、空無相無作に入る。則ち涅槃常樂を得る故に。是れを甚深法と名づく。復次に一切法は空に非ず、不空に非ず、有相に非ず、無相に非ず、有作に非ず、無作に非ずと観ず。是の如き観中に心亦著せず。是れを甚深法と名づく。偈に説くが如し。

因縁生法、是名空相 亦名仮名 亦名中道（以下略）

これを見るとき、『入大乘論』『大智度論』ともに、三解脱門という実践修道と関連して、『中論頌』の偈を引用していることは、縁起、空、仮、中道の關係を三解脱門に関連せしめる背景があつたことを予想させるものである。

次に引用の典拠の明らかな偈は、(5)である。

- (5) 因縁所生法 是即無自性  
若無自性者 云何有体相

これは『十二門論』第一偈に相当すると考えられる。羅什訳は次のようである。<sup>17</sup>

衆縁所生法 是即無自性

若無自性者 云何有是法

この偈はナーガールジュナにおいて強調される「縁起無自性」<sup>18</sup>「自性がなければ存在の存在性がない」「自性がなければ存在は成立しない」という主張と共通するものであり、いわば中観学説の中心をなす思想である。『入大乘論』では引用偈に先立つて次の問題が展開される。<sup>19</sup>

問曰 因縁生法即ち是れ体相なりや。

答曰 是の事然らず。何を以ての故に。若しくは体相有り。若しくは体相無し。汝の及ぶ所に非ず。汝の所説の如く、因縁を以て体相と為すとは、因縁は他より生ずるが故に。云何んが有体なりや。体相と言うは自性にして起る。因縁に属さず。若し因縁に属すれば則ち自性無し。譬えば仮借は自有に非ざるが如し。是の故に因縁は仮他にして成ず。自体有ること無し。尊者竜樹の所説の偈の如し。

『十二門論』の註釈は、衆縁生法に二種あることを説明したあと次のように言う。<sup>20</sup>

是の如く、内外の諸法は皆衆縁より生ず。衆縁従り生ずるが故に、即ち是れ性無きにあらずや。若し法に自性無くんば、他性も亦無く、自他も亦無し。何んとなれば、他性に因るが故に自性無

し。

これで明らかのように、この偈はもっぱら無自性についての論議と思われるが、『入大乘論』もまた「体相」という語を用いて、無自性に関して論じたものと思われる。

- 次の引用偈は(6)である。
- (6) 不説分別諦 不得於実諦  
若不得実諦 則無得涅槃

これは『中論頌』第二十四章第一〇偈であり、羅什訳は次のようである。

若不依俗諦 不得第一義  
不得第一義 則不得涅槃

そして引き続き引用される偈

- (a) 諸仏演說法 常依於二諦  
分別於世諦 及与第一義  
若不能分別 真俗二聖諦  
如是則不知 仏法甚深義

これは『中論頌』第二十四章第八偈(a)、第九偈(b)の引用である。羅什訳は次のようである。

- (a) 諸仏依二諦 為衆生說法  
一以世俗諦 二第一義諦  
(b) 若人不能知 分別於二諦  
則於深仏法 不知真実義

『入大乘論』と中観学説(八 九)

これは言いまでもなく中観学派の二諦説の典拠となる偈である。『入大乘論』はこれらの偈の引用に先立って次のように言う。

諸法本と空なる故に、恒に是の空を見る。過去仏の所見の如く、空相今亦復た然り。是の故に我れ因縁法空を説く。是れ則ち過無し。是れ先に第一義諦、後に分別世諦を立てるが如く、我れ及び衆生、仏と仏者乃至一異則ち過無し、尊者竜樹の所説の偈の如し。

(……以下引用偈……)

是の故に因縁の法は空にして、名づけて真如と為す。法性は實際にして、是れを名づけて第一義諦を修習し、因縁空を見る。即ち是れ空解脱門なり。若し空を見れば、則ち諸法相を見ず。是を名づけて無相解脱門なり。無相を見る故に願求する所無し。是れを名づけて無願解脱門なり。是の如き三解脱門に安住す。

中観学派の二諦説の構造には諸註釈者の中で相違すること、すでに指適せられているところである。

世俗諦とは、一切法は性空なるも、而も世間は顛倒の故に虚妄の法を生ず。世間に於て是れ実なり。諸の賢聖は真に顛倒性を知るが故に、一切法は皆空にして無生を知る。聖人に於ては是れ第一義諦にして、名づけて実となす。諸仏は是の二諦に依つて、衆生のために法を説く。若し人如実に二諦を分別すること能はずんば、則ち甚深なる仏法に於て実義を知らず。

これは青目釈であり、二諦説の構造を説明しているが、これに比較すると『入大乘論』は、世俗諦(分別世諦)について説明をしていない。また、二諦説の構造を説明するための釈文とは見られず、やはり三解脱門の解釈における論証の引用偈としてゐる。ただし、因縁法が空である、という立場が第一義諦であるという理解は中観学派の説くところと同じものであり、それを、この論は真如という語で表現している。

以上検討してきたように、ナーガールジュナの名のもとに引用される偈六回のうち、明らかに検索しうるものはその半数である。(1)は不明であり、(3)(4)は『中論頌』中に類似の表現のものが見られるとも考えられるが一致しない。このような点から『入大乘論』にはナーガールジュナの所説といわれながら、不明、不正確な偈があること、また、引用偈の内容を検討すると必ずしも中観学説を正確に理解した上での引用とは考えられないものがあることに気づくのである。ただし、これが著者の理解力によるものであるか、訳者の訳力によるものかはにわかに判断することは困難であると言えよう。

なお、『入大乘論』の構成上からみると、ナーガールジュナの引用偈が、すべて巻上、義品第一に集中していることに注目しなければならぬ。この義品の趣旨は大乗の義を説いて、そのすぐれているところを、教と人の面から明らかに

しているものと考えられており、その論証に、中観学派の諸論師が大きな役割をはたしていると言える。中観学説の理解の不十分を別としてもこの論書は大乗仏教論書の流れの中に位置づけられると思われる。

なお、ここに触れることの出来なかつた提婆の八回、羅喉羅の二回の引用偈については別の機会に検討したい。

- 1 上山大峻『入大乘論』における大乘仏説の論証『宗学院論集』三七、昭四〇。
- 2 『仏書解説大辞典』第八巻、三五一—三五三頁。
- 3 平川彰『初期大乘仏教の研究』三頁以下参照。
- 4 早くは塩田義遜「堅意の入大乘論に就て」『宗教研究』通年一一四号、一六三—一六五頁。また、宇井伯寿『宝性論研究』四二—四二五頁参照。同じく『仏書解説』第八巻、三五三頁にも簡略にして出る。
- 5 「如来法身住於一切衆生身中」大正三二、四九頁上。なお、如来蔵思想の指摘は、前掲、塩田論文(一六六頁)、宇井前掲書(四二九頁)、平川彰『インド仏教史』下巻一七七頁、一七八頁になされている。
- 6 宇井前掲書、四〇七—四〇九頁までの要約。
- 7 宇井前掲書、四一〇—四一五頁。
- 8 大正二八、一頁上。
- 9 大正三二、三六頁中、四一頁中、同頁下、四二頁上(二箇所)、同頁下(二箇所)、四八頁中の計八回。

10 大正三二、四八頁上、下の二回。

11 解脱という本もあるが解説をとる。大正三二、四〇頁註参照。

12 (3)(4)の引用偈は例えば青目釈『中論頌』第十五章第十、第十一偈、「定有則著常、定無則著断、是故有智者、不応著有無」、「若法有定性、非無則是常 先有而今無、是則為断滅」など類似する偈も考えられるが、正確には一致しない。

13 漢訳『灯論』は「衆縁生法」、「中観釈論」は「因縁」である。

14 『中論』第二十五章までの「相依性の縁起」と第二十六章の「時間的生起関係」の縁起である。中村元「空の論理」8、「縁起」『現代思想』一九七七・一〇、二二〇頁参照。

15 大正三二、四〇頁上。

16 大正二五、一〇七頁上。

17 大正三〇、一五九頁下。

18 安井広済『中観思想の研究』一〇〇頁以下参照。

19 『中論頌』第一章第十二偈、第十五章第四偈。

20 大正三二、四一頁中。

21 大正三〇、一六〇頁上。

22 大正三二、四二頁上。

23 安井前掲書、二〇七頁以下参照。又、たとえば平野隆「入中論の二諦説」『大谷学報』三九一三。北島利親「清弁と月称の二諦論」『印仏研』一一一一。光川豊芸「中観派の二諦説」特に空思想と二諦との交渉より」『竜大仏教文化紀要』二、等。

24 大正三〇、三二頁下。

25 宇井前掲書、四一九頁。

(北海道武蔵女子短期大学教授)

『入大乘論』と中観学説(八 力)

掲載されなかった諸氏の発表題目(二)

- Saundaranandaの修辭(1) 東直登(仏教大学院) 南インドのAlvdr 研究(I) 平岡昇(大谷大卒) Mudhi Lafzahi (Lahore, 1976) について 溝上富夫(大阪外語大) ヒンデー語文献から見た詩論書・文学理論書
- 十九世紀を中心として—— 町田和彦(東京外語大) ダリト文学(II) 石田英明(東京外語大) スリーランカの諺 橘堂正弘(椋山女学院大) ヴァイシエーシカ・スートラの構成について 野沢正信(沼津工業高専) バガヴァッド・ギーターにおける解脱について(2) 西尾秀生(立命館大) ラグナータ・シローマニの句義批判について 長尾睦司(熊本音楽短大) Śrauta 祭祀研究 II nigada 永ノ尾信悟(九州東海大) Vīsotarga —— グリヒヤ祭祀研究 IV —— 高橋明(早稲田大学院) シャンカラの世界観 島岩(名古屋大) ふたたびサンキヤーについて 中田直道(鶴見大) Abhihanappa dīpika について 片山一良(駒沢大) Sureśvara の Ātman 論について 道林信郎(駒沢大学院) TS(P) : Traikāyaparīkṣā について 秋本勝(京都大卒) Uddyotakara の無我説批判(2) 田丸俊昭(龍谷大) Kumārīla の Ātman 論をめぐって 服部正明(京都大) Nyāya-Bhāṣya に对ける Sāṃnyā と Jai 友岡雅弥(大阪大学院)